

Title	日本語の雑談の連鎖組織 : 雑談の体系的な教育のために
Author(s)	筒井, 佐代
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/59138">https://hdl.handle.net/11094/59138</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	筒井 佐代
博士の専攻分野の名称	博士（言語文化学）
学位記番号	第 25052 号
学位授与年月日	平成24年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	日本語の雑談の連鎖組織－雑談の体系的な教育のために－
論文審査委員	(主査) 教授 仁田 義雄  (副査) 教授 鈴木 睦 教授 小矢野哲夫 教授 三原 健一 世界言語研究センター教授 真嶋 潤子

### 論文内容の要旨

本研究は、日本語の会話教育において、雑談を体系的に指導することができるようにするため、会話分析の手法を用いて日本語の雑談データを分析し、その構造を明らかにしようとするものである。

日本語の会話に関する研究は、1990年代以降盛んに行われるようになり、会話の構造に関しては、勧誘、依頼、相談、問題解決など、相手に働きかけて目的を達成する課題遂行型の会話が研究対象とされてきた。一方、雑談については、雑談のデータを用いた会話の研究は多く見られるものの、雑談の構造に関する研究は、管見ではほとんど存在しない。このような状況を反映してか、日本語教育においても、雑談の教育は体系的に行われておらず、何をどのように指導すればよいのかすら明らかになっていない。

本研究は、日本語教育において、雑談を体系的に指導する必要があると考え、雑談をパターンとして捉え、必要な指導項目を設定できるようにするため、雑談の構造の分析を行った。南（1983）では、日常会話を談話として分析するために、談話を構成する単位を考える必要があると述べ、そのためには「談話の構造の面の特徴も、内容の面の特徴もうまくとらえることができ、談話の構造全体の分析記述に役立つようなものである必要がある」ことを指摘している。本研究は、南のこの指摘を踏まえ、雑談のデータを、内容の面である「話題」と、構造の面である「連鎖組織」の二つの概念を軸として分析を行い、話題ごとの連鎖組織と言語形式を抽出し、類型化することを試みた。そして、この分析結果を会話教育に応用し、雑談の教育を体系的に行うための考察を行った。

本研究は、以下のような章立てから成る。

はじめに

- 第1章 日本語の会話教育に関わる先行研究
- 第2章 分析方法
- 第3章 雑談の連鎖組織の類型
- 第4章 会話参加者のことを話題とする連鎖組織
- 第5章 第三者のことを話題とする連鎖組織
- 第6章 現場の事物のことを話題とする連鎖組織
- 第7章 雑談の体系的な教育に向けて
- 終章

以下、本研究の内容を第1章から順にまとめる。

第1章では、日本語の会話教育に関わる先行研究として、日本語の話しことばの研究と、会話教育の指導項目に関する研究の、大きく二つに分けて先行研究を紹介し、考察を行った。日本語の話しことばに関する研究については、日本語教育の視点から着想を得た研究や、日本語教育への応用を念頭に置いた研究の主要なものを取り上げ、特に、本研究の目的である会話の構造に関する研究、および雑談に関する研究について、これまでの研究成果と問題点の指摘を行った。会話に関するこれまでの研究は、日本語教育にコミュニケーション・アプローチが導入された1990年代から現在に至るまで、日本語教育の指導内容や教材に影響を与えてきている一方、雑談に関する研究は、話題の展開に使用される表現形式の研究や、インタビューや話し合い等、他の種類の会話との性質の違いなどの指摘はあるものの、会話教育に応用するに十分な研究が行われているとは言えない。

続いて、会話教育の指導項目に関する研究では、従来の研究を、会話ストラテジーおよび談話技能の観点からの研究、文法教育の見直しの観点からの研究、言語行動の教育の観点からの研究の三つに分け、それぞれの成果と問題点の指摘を行った。会話教育の指導項目に関する議論は1980年代から行われてきているが、未だ、指導項目の設定はなされていない。本研究では、会話教育は、言語行動のレベルでの指導が必要だという視点に立ち、上述の南（1983）の指摘にもあるように、雑談も他の言語行動と同様、談話の単位から成るものとして扱って、その単位ごとに指導を行う必要があることを指摘した。

第2章は、本研究の分析方法の説明である。本研究では、「話題」および「連鎖組織」の2つの概念を用い、雑談のデータを話題ごとに区切り、区切った単位ごとの連鎖組織を分析するという方法をとった。この章では、本研究で扱う「雑談」を「特定の達成するべき課題がない状況において、あるいは課題があってもそれを行っていない時間において、相手と共に時を過ごす活動として行う会話」と定義し、本研究で用いる雑談データの詳細について述べている。最後に、分析の手順についての概略を説明した。分析の手順は、以下のとおりである。

- (1) 話題の移行による分析単位の設定
- (2) 分析単位ごとの連鎖組織の抽出
- (3) 抽出された連鎖組織の第一発話のタイプによる分類
- (4) 各連鎖組織に現れる話題のタイプの分類
- (5) 各連鎖組織に現れる言語形式の抽出

第3章では、第2章で述べた分析手順について、まず、分析の詳細な方法をデータを用いて説明し、続いて分析を行った結果抽出された、話題区分ごとの連鎖組織の類型を示した。

(1) については、以下のような基準を設けて、雑談データを話題の内容の移行によって区分した。

- 1) それまで話題となっていた対象や事態とは異なる、新しい対象や事態への言及
- 2) すでに言及された対象や事態の異なる側面への言及
- 3) すでに言及された対象や事態の異なる時間における様相への言及
- 4) すでに言及された対象や事態について、それと同種の対象や事態への言及

#### 5) すでに言及された個別の対象や事態の一般化

このような基準で区分したデータそれぞれについて、(2)の連鎖組織の抽出を行った。続いて、(3)では、抽出した連鎖組織を、第一発話が質問、報告、共有、独り言のいずれであるかによって、以下のIからIVのように分類した。I～IVの対立関係もともに示す。

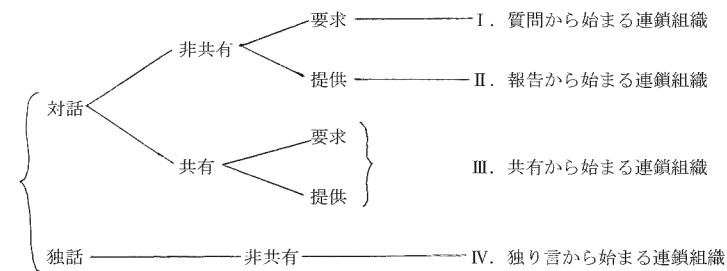


図1：開始の発話による連鎖組織の類型

次に、手順(4)として、それぞれの連鎖組織を、話題のタイプによって、以下のように分類した。

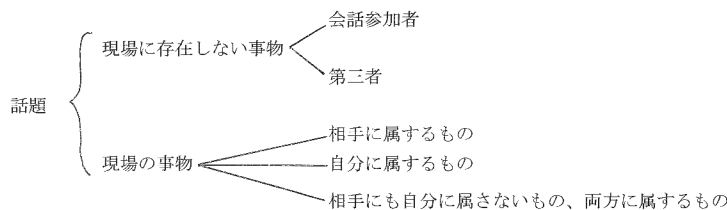


図2：話題内容の分類

なお、これらの話題は以下の話題内容によって下位分類される。

1. 事態・属性系：【経験】【予定】【現状】【習慣過去】【習慣現在】【能力】【事実】  
【ニュース】【作品】【存在】
2. 思考・感覚系：【意見】【方針】【評価】【好み】【感覚】【感情】【願望】【意志】

(5)の言語形式の抽出は、各連鎖組織において、データ中に典型的に用いられていた形式を抽出した。

以上の、話題の開始の発話による分類と話題内容の分類を組み合わせると、雑談の連鎖組織の類型は、以下の「話題による連鎖組織の類型」に、図1のI～IVの連鎖組織の類型が下位分類として組み合わさるという形となる。なお、I～IVは、その内容と連鎖組織の性質の違いによって、上述の「事態・属性系の連鎖組織」と「思考・感覚系の連鎖組織」に下位分類される。

#### <話題による連鎖組織の類型>

1. 会話参加者のことを話題とする連鎖組織
2. 第三者のことを話題とする連鎖組織

2. 1 会話参加者の一方が情報を持っている場合
2. 2 会話参加者のいずれも情報を持っていない場合
3. 現場の事物のことを話題とする連鎖組織
  3. 1 相手に属するものを話題とする連鎖組織
  3. 2 自分に属するものを話題とする連鎖組織
  3. 3 相手にも自分にも属さないもの、あるいは両方に属するものを話題とする連鎖組織

第4章から第6章では、上述の類型に従い、第4章「会話参加者のことを話題とする連鎖組織」、第5章「第三者のことを話題とする連鎖組織」、第6章「現場の事物を話題とする連鎖組織」の順で、それぞれの話題に見られた連鎖組織と、そこで用いられていた言語形式について、事例を挙げながら記述を行った。本研究の分析から、雑談においては、どのような話題をどのような発話で開始するかによって、その後のやりとりの連鎖組織が決まり、必要な言語形式も決まることが明らかになった。

本研究では、分析の結果、30種類の連鎖組織を抽出したが、そのうち25種類が会話参加者のことを話題とする連鎖組織、2種類が第三者のことを話題とする連鎖組織、3種類が現場の事物のことを話題とする連鎖組織であった。会話参加者のことを話題とする連鎖組織のうちのいくつかは、他の話題の連鎖組織にも現れているが、本研究のデータでは、会話参加者のことを話題とする連鎖組織が、もっともバリエーションが豊富であった。特徴的な連鎖組織をいくつか挙げると、相手の意見を質問する連鎖において、開始の発話が「したくない?」「微妙じゃない?」など、否定疑問の形式を用いて自分の意見を暗示しつつ相手の意見を求めることにより、〈意見要求－意見提示〉が〈意見提示－同意／不同意〉でもあるという連鎖組織が見られたこと、報告から始まる連鎖組織は、いずれも最初の報告の発話において報告者の評価や感情が表されるため、聞き手はその評価や感情への反応を期待され〈情報提供－評価／共感〉などの連鎖組織となること、共有から始まる連鎖組織は、会話参加者が「同じ」であることを指向するため、〈語り－語り〉〈想起要求－想起要求〉など、対称的な連鎖組織が現れたこと、などである。

第7章では、本研究での話題と連鎖組織の分析結果を踏まえ、以下の3点について分析、考察を行った。まず、話題を開始する発話タイプおよびその後の連鎖組織と、そこで話される内容の性質には、関連があるのかどうかという問題について、事例を分析し、話題開始の発話が異なると、内容の性質も異なることを明らかにした。

次に、本研究の分析結果を会話教育に応用するための考察を行った。雑談の体系的な教育のためには、日本語学習者にとっての話題の必要性、および連鎖組織と言語形式の難易度を考慮して、話題とその話題を話すための連鎖組織および言語形式をセットで指導項目と捉え、レベル別に配列することが必要である。雑談の教育においては、単に話題を設定して会話を行うという練習をするのではなく、話題を開始する発話とその後の連鎖組織、およびそのための言語形式を用いたモデル会話を提示して練習することが重要であることを指摘した。

最後に、雑談の対照研究の重要性について、事例を挙げて論じた。本研究で得られた連鎖組織は、日本語に固有のものもあれば、言語普遍的なものもあると考えられる。本章では、タイ語と日本語の連鎖組織の違いの可能性について考察を行い、異文化理解を深める上でも、連鎖組織の対照研究を行い、言語体系だけでなく、その背景にある文化社会に関する規範を明らかにしていくことが重要であることを指摘した。

終章では、本研究の結果をまとめ、残された課題を3点指摘した。1点目は、連鎖組織の連鎖についての分析、2点目は、連鎖組織の種類によって、同じ話題でも話される内容がどのように異なるかの分析、3点目は、個々の言語形式の用法の分析である。日本語学習者が自ら話題や発話タイプを選択し、雑談を続けていくことのできる能力を養うために、これらの問題を明らかにし、指導項目の体系的な設定へと結びつけていく必要があることを指摘した。

## 論文審査の結果の要旨

『日本語の雑談の連鎖組織—雑談の体系的な教育のために—』と題された本論文は、日本語教育における談話レベルでの教育を効率的に体系的に行うことができるように、

その基本となる知見の獲得のため、日本語の雑談をデータ・対象として、その中でも構造的性が存することを発見し、それをなるべく組織的・体系的に捉えようとしたものである。雑談は、非母語話者の場合、かなり日本語能力を有する者であっても、なかなか自然に的確に入っていけないところがある。これは、雑談というものに対しても、談話レベルの教育において体系的な指導の必要性を示唆している。しかし、従来、談話レベルの教育において雑談が重視されていたとは思えない。これは、雑談がどういった会話・談話であるのか、雑談の全体的な構造がどのようなものであるのかが、ほとんど分かっていなかったことが基因しているものと思われる。

本論文の長所はいくつもあるが、まず上げられるのは考察対象の新しさである。従来も、勧誘や依頼や相談など、相手に働きかけて目的を達成する課題遂行型の会話に対しては、会話の目的が明確であることから来る、(1)会話の構造の存在が比較的分かりやすい・取り出しやすい、(2)構造のバリエーションに関わる要因が比較的明瞭である、(3)またそれらと連動して、言語形式の特徴も抽出しやすいなどの性質があり、研究がかなり多く存在する。それに対して体系性や構造的性の希薄な雑談に対しては、詳細で本格的な研究はほとんどない。本論文は、そのような構造的・体系的に極めて希薄である雑談に対して、それが有している構造を取り出そうとした意欲的な考察である。一段抽象化を上げ、発話をコミュニケーション上の機能のレベルで捉え、その連鎖を分析・記述することによって、雑談の分析を行い、雑談が限られたパターンのやりとりからなることを示し、その連鎖組織のタイプの取り出しに成功している。

さらに本論文の優れた点として、混沌としているとも思えるデータに対するきめの細かい丁寧な分析・記述が上げられる。収集され考察の対象となっているデータが十分に多量であることが、まずもってきめ細かく丁寧な分析・記述を準備し可能にしている。分析・記述の枠組みへの配慮も行き届いている。雑談での発話連鎖のあり方によって決まってくることに気づき、雑談の内容を丹念に分析し、話題の下位種として、事態・属性系と思考・感情系に分け、それらをさらに10種と18種に分けるといって、きめ細かい下位種の抽出を提案している。また、話題内容および連鎖開始発話によって、その後の連鎖組織が決まることを発見し、対話か独話的か、共有か非共有か、要求か提供かの要因によって、第一発話が質問から始まるもの、報告から始まるもの、共有から始まるもの、独り言から始まるものに分け、30という豊富な連鎖組織の種類の取り出しを行っている。

言語に関わる研究であれば、構造面への形式的把握・明示化が要請される。ただ、談話は、文などに比して構造面への形式的把握の難しい対象である。体系性・構造的性の希薄な雑談であれば、その困難さにはかなりのものがある。本論文は、そのような構造面への形式的把握の難しい雑談に対して、雑談の話題内容に注目することによって、雑談の連鎖組織の種類の異なりを取り出し、さらに連鎖組織のタイプの違いに応じて現れる言語形式の違いを明らかにしている。たとえば、非共有の〈質問要求〉では「～か」を伴

い、共有の〈想起要求〉では「～っけ」が、非共有の〈語り〉では「～したんだ」、共有であれば「～したね」の形式が現れることを指摘し、共有知識が話題になっている連鎖では、「～じゃない？」や「～わ」でなく、「～よね」の形式の発話で始まることを明らかにしている。また、現場の事物を話題にする会話での言語形式の特徴として、現象描写文などの新情報の文で始まる、言及対象が既知扱い、言及対象が言語化されないことが多い、指示詞が用いられることなど、といったことをも指摘している。

話題内容による連鎖の開始発話への制約、開始発話によるその後の連鎖組織に対する制約、および連鎖組織のタイプと現れる言語形式との相関関係などの取り出しは、雑談さらに言えば談話の分析・記述に対して、内容と構造の双方の観点による分析・記述の方法を提唱したものと言えよう。

ただ本論文の分析・記述は与えられたデータから得られたもので、可能態としての雑談総体のありようを明るみに出し切っているものではない。新しいデータが付け加えられれば、本論文で提出されている連鎖組織の類型以外のものが発見されることがないとは言えない。さらにどのような連鎖のあり方を取れば雑談として不自然なものになってしまうのかが、暗示はされているものの、明示的に示されているわけではない。予測可能性への厳密な言及は、談話の領域の研究においては、ほとんど不可能な作業であり、それが実現されていなかったからといって、本論文の価値を損なうものではない。

本論文は、雑談のみならず、関連する対象・現象に対して今後行われる分析・記述への1つの有力な参照枠になることは間違いないであろう。

これらのことを総合的に判断し、本審査委員会は、本論文が博士（言語文化学）の学位を与えるにふさわしい論文であると判断した。